

よみがえる 記憶



当時、6.16集中豪雨災害を目の当たりにした
左：竹内美保子さん(84)、右：竹内孝枝さん(88)

ドンという音とともに

6・16災害の記憶を今でも鮮明に覚えているという美保子さんと孝枝さん。災害があった年は、干ばつで地域のあちこちで「水喧嘩」が起きていたとのこと。干ばつの影響からか雨が降り出したときは、「恵みの雨」のように感じた。

しかし、瞬く間に雨脚が強くなり、危険を感じた。今までに見たこともない豪雨の様子に孝枝さんを含む親戚のみんなが美保子さん宅に避難した。

美保子さん宅の前には広い田んぼがあり、ちょうど田植えが終わって稲が育ち始めていたところだった。それが、見るも無残に集中豪雨により、流れてくる泥が鉄砲水のように田んぼを流れ下り、まるで川のようにになっていた。

「こんなにひどい災害はない。」とふたりは言う。

家の中で避難していたところ、豪雨や雷の音をかき消すほどの「ドン」という大きな音がした。その瞬間、家の電気が消えた。近所の人の家が流されてしまった。家主は、助けを求め、美保子さん宅に来たという。みんなでろうそくを立てながら豪雨が過ぎ去るのを待っていた。

他にも家が流されそうで避難しようとしていた人がいた。80代のお年寄り。近くに大きな寺があり、そこへ避難しようとしたが、道中の橋が濁流で流されてしまった。寺へはその橋を渡る必要があった。避難するにも場所や移動手段が

ないまま、そして、いつ濁流に家が流されるかも分からぬまま、豪雨が収まるのを願うしかなかったという。

復旧に立ち上がる

家も車も牛も農地さえも流され、あらゆる人が悲しみに包まれた。それでも美保子さんと孝枝さんは復旧に立ち上がった。「田んぼに入った泥や砂利を出す作業を親戚だけでやるには大変だった。」と美保子さんは言う。そこに市内の小中学生が復旧作業を手伝ってくれた。おかげで田んぼを復旧するのに、そう何日もかからなかったとのこと。近所の半壊した建物

も地元の建設業者が直していた。

たった一晩で、恐ろしい被害をもたらす災害から立ち上がるには、地域のちからが大切だとふたりは身をもつて感じたという。

真剣に災害について話をするふたりから、自然の猛威の恐ろしさが伝わる。



①復旧された橋の上で、当時の記憶を語る。

②広いたんぼが豪雨により川のようにになっていた場所。